

# 平城宮跡第122次発掘調査現地説明会資料

奈良国立文化財研究所

平城宮跡発掘調査部

昭和55年5月31日

菅原 正明

平城宮跡発掘調査部は昭和55年3月18日から第122次調査として宮の南面東門（壬生門）について発掘調査を行ない、門の基壇・南面大垣および二条大路を明らかにしてきた。発掘面積は約3000㎡で、調査は現在進行中である。

## 1. 地形・遺構の概要

南面東門周辺地域の平城宮造営以前の地形は第2次内裏地域から南に延びる小支丘の南に広がるやや平坦な沖積地である。調査地の中央には東西方向の道路が通っており、この道路は平城宮南面大垣の位置と推定されていた。

1は東南に向かって低くなっており、それぞれ30cmほどの段がついている。

検出した主な遺構は門基壇・南面大垣・二条大路その他の遺構（掘立柱建物・南北溝）である。

**門基壇** 基壇上部は著しく削平され、礎石や根石は残っていないが、基壇基礎築成にあたっての掘込み地業が行われており、その輪郭によって門の規模を推定できる。掘込み地業の規模は東西28.9m、南北14mである。この掘込み地業北縁に接し、西側に幅60cmの地覆石抜き取り痕跡があり、この中に凝灰岩の粉末が残っている。さらに掘込み地業北縁の北1.2mに小柱穴が東西に8間分並び、これは足場穴と考えられる。

**南面大垣** 門基壇の東・西側で大垣をそれぞれ長さ16.5mにわたって検出した。西側の大垣は現在の道路の高まりがそのまま大垣の築土で、高さ約50cmほど残っている。しかし東側の大垣は現在の道路が南にやや寄りっており、築土は後世の削平により基底部のみを残すだけである。大垣は浅く掘込み地業を行っており、その基底幅は2.7mである。大垣基底部の南・北側それぞれ20cmには大垣を版築で築成した時の堰板の添柱穴がある。この添柱穴の配置から、大垣の改修の可能性が考えられる。またこの大垣の南・北側それぞれ1.2mには両岸を玉石で護岸したらしい雨落溝がある。北側の雨落溝は早い時期に埋められ、その北側に幅1.3m、深さ0.5mの雨落溝が掘られている。この雨落溝は門基壇の北側両隅で基壇にそって鉤形に折れ曲がる南北溝（A・A'）とそれぞれ合流している。両南北溝間の距離は約26mである。後にこの鉤形の南北溝は砂で埋められ、門基壇の東・西側で雨落溝と直交する南北溝（B・B'）に改めている。この両南北溝間の距離は約32.2mである。そしてさらにこの南北溝は埋められ、両雨落溝は門基壇の東・西側それぞれ2.4mで止っている。この最後の雨落溝の埋土から瓦が多量に出土した。

**二条大路** 大垣の心から南12mで二条大路の北側溝、南49mで二条大路の南側溝を検出した。北側溝は幅約3.3m、深さ0.9mの素掘り溝であるが、門基壇前面のみ両岸を32mにわたり、人頭大の石を5段ほど積み、護岸している。後にこの護岸した箇所を黄灰砂で埋めため、二条大路北側溝は門の東・西両端で止まる浅い素掘り溝に改められる。この新側溝は両端部のみ玉石1段で護岸している。門前の埋めたては側溝下層出土の土器型式や木簡から天平年間と考えられる。南側の護岸石は近世に抜きとられている。南側溝は幅1.7m、深さ0.5mの素掘り溝である。北側溝と南側溝との間は二条大路の路面にあたり、路面幅は35.2mである。南側溝南側の築地は後世の地下げにより、検出できなかった。

**その他の遺構** 門の西南方に検出した掘立柱建物は南北棟3間（5.8m）×2間（3.4m）で、北側溝が完全に埋った後に建てられており、北で東にふれる。南北溝Cは門の心より東約34mにあり、大垣北雨落溝に合流する幅約1m、深さ0.4mの素掘り溝である。溝中より瓦が多量に出土した。

## 2. 出土遺物

二条大路北側溝下層から木簡・瓦・土器・木製品がまとめて出土した。木簡の中には天平4年・6年の年紀をもっとものがそれぞれ1点出土している。木製品の中で特に人形が60点以上出土したことは注目される。

## 3. 成果

今回の調査において南面東門・大垣・埴地・二条大路を一体として明らかにすることができた。そしてさらに次の新知見を得た。a 南面東門の基壇規模は朱雀門（33.25m×18.1m）や西面南門（32.1m×13.9m）より小さく、西面中門（29.4m×13.9m）とほぼ同じである。b 脇門や仗舎は検出できなかった。c 二条大路北側溝は門基壇前面32mのみ人頭大の石で護岸しており、天平年間以降には、この部分が埋めたてられている。d 二条大路北側溝より多数の人形が出土しており、朱雀門における大猷に関するものと考えられる。

